

# 2019 年度 入学 試験 問題

## 国 語

(試験時間 13:25~14:25 60分)

1. 解答用紙は、マーク解答用紙のみです。
2. 解答は、必ず解答欄にマークしてください。解答欄以外にマークすると無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. 解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。



一 次の問いに答えなさい。

〔問一〕 次の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、左の各群の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。

ア 体制をサツシンする

A 貿易マサツが起ころ

B 患者をシンサツする

C 雑務にボウサツされる

D 女優をサツエイする

E 礼状をインサツする

イ 話がカキヨウに入る

A カクウの動物

B 努力をヒヨウカする

C カサクに選ばれた

D カン化が進む

E カダイを抱える

ウ くれぐれもソソウのないように

A ソボウな振る舞い

B キヨソを失う

C フランス語のソヨウがある

D 進歩をソガイする

E クウンな議論

エ 何かコンタンがある

A キョウタンに価する

B コタンの境地に至る

C タンセイを込めて祈願する

D タンリヨクが据わっている

E 事件のホツタン

オ 古い習慣をトウシユウする

A 寒波がシユウライする

B 事態のシユウシユウがつかない

C 委員会をシヨウシユウする

D 全課程をリシユウする

E 大臣のキョシユウが注目される

〔問二〕 次の漢字の読みを、左の各群の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア 逝去

A せつきよ

B せつきよ

C せいきよ

D せつこ

E せつこ

イ 絡む

A やむ

B たわむ

C くるむ

D くむ

E からむ

〔問三〕

次の慣用句の空欄に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

雪辱を

ア

馬齢を

イ

末席を

ウ

A 重ねる

B 汚す

C 果たす

D 弄ぶ

E 晴らす

〔問四〕

次の言葉の意味としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

ア 流れに棹さおさす

イ つむじを曲げる

ウ 眉に唾を付ける

A 人情にほだされて理性を失う

B だまされないように用心する

C すぐに結論を出そうとはしないで気長に見守る

D 気分を損ねてわざと逆らったり意地悪く振る舞ったりする

E 物事の時流に乗って順調に進行させる

〔問五〕 次の意味を表すものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

ア 見通しがつかず、どうしてよいかわからない様子

イ あれこれ迷ってぐずぐずしている様子

A 遅疑<sup>しゆん</sup>逡<sup>しゆん</sup>巡

B 有象無象

C 獅子<sup>し</sup>身中

D 雲散霧消

E 五里霧中

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

(1)

現在の日本社会では、学校卒業後の就職、転職、定年後の「第二の人生」あるいは職探しなど、人生の岐路にたつ状況に直面すると、多くの市民や学生たちは自分の就職先企業、官庁、学校、組合などの将来の可能性や、持続性に関して漠然とした不安に直面する。

この不安は営利組織であろうが、非営利組織であろうが関係がない。安定した職場として定評があつた、郵便局や電力会社も今ではそうではない。<sup>(2)</sup>現代都市という「砂のような」社会では人間関係が希薄で相談する人もなく、不安がますます、大きくなっていく。

倒産とか、リストラ、不確実性とか、危険とか、リスクという言葉も日常化してきて「明日はわが身」に降りかかってくると誰もが思っている。

さらに新聞を見れば株価に示される経済、選挙のたびに揺れ動く政治も不安定で不気味ですらある。そこには、かつてのように「努力して行動すれば安定した職や仕事・生活を得られる」という「心の『よりどころ』」がない。あたたかな家族や友人が待つ「心の『ふるさと』」もない。

(3)、われわれは、何を頼りにして生きてゆけばよいのであろうか。

この問いに対する答えとして、二つの解答が予想される。

ひとつは、「心の『よりどころ』」「心の『ふるさと』」とは何かを考えてみることに、あるいは、それを発見して人生を充実させた先覚者たちの足跡をたどることである。例えば、都市から離れて地方へ向かい、四国八十八箇所の霊場を巡って弘法大師の歩みを感じて学び参考にしてみよう。そうすれば、歩くうちに、お寺やお接待の人々の人情に接して、そこに農山漁村などにある「心の『よりどころ』」「心の『ふるさと』」を発見する人々も多い。福原義春は、かつて作家の瀬戸内寂聴氏に誘われ、毎日新聞社長の斎藤明氏と共に四国の遍路を歩いたことがある。数か所目の寺を後にしたとき、逆方向から歩いてきた若者と出会った。

聞けば彼は様々な悩みを抱えて仕事を辞め、全霊場の遍路を終えたあとのお礼参りであった。彼は、そうして歩くうちに心中のわだかまりが解消し、別の仕事で頑張るのだとさわやかに話した。

人々の人情や「まごころ」に触れるとき、人を信頼して生きる気持ちが湧いてくる。そうすれば、次に、湧き起ってくるのは忘れかけていた「人としての良心」であり、他人の良心を信じる、信頼をよりどころとした生き方への関心である。それは「自分の良心に従って、よき相手に迷惑をかけず、良心的な事業経営や、良心的な働き方、良心的な経済関係づくりを通じて、個人が経済的に自立し、互いを尊敬しながら生きる」という決意である。これが「もう一つの答」であるかも知れない。

実は、良心を身につけているということは、良心を元手「文化資本」として「良心的な商品」「良心的なサービス」を生み出せることを意味している。日本の近江商人は「売り手よし。買い手よし。世間よし」の三方よしの事業活動を展開したといわれるが、これこそが「良心的な仕事」<sup>(4)</sup>の全体像であろう。このような経営によって人々が自立できれば、それは、よき人間関係を持つ社会となろう。

このような経営（文化資本の経営ともいう）を発見したとき、多くの人々は「指示を待つて仕事をするのではなく」、顧客とのコミュニケーションを大事にし、自分で考えて仕事を構想し、社員一人一人が個性に応じて出番を持つ場などを積極的に提案するのではないだろうか。

### 経営者や職人への関心が高まっている

最近では、学生時代から「起業する」。最初から「経営者をめざす」などの「起業志向」が登場してきた。起業に関する学校や研修の機会も増えている。

## 【I】

(5) 、金銭的な価値を追い求めるのではなく、社会貢献や非営利事業を志す「NPOなど」への参加者も増大した。同時に、この世界でも「経営」によって非営利事業の採算を確保することが、志を生かす上でも、ますます重要となってきた。

【Ⅱ】

さらには、伝統産業などの職人となり、先覚者の熟練や技巧、判断力を継承し、創造的に発展させる志向も急激に高まっている。

【Ⅲ】

しかし、実態としては、テレビや新聞紙上でも、「成功した起業」「安定した経営」などの、グッド・ニュースが登場しては消えていく。数年は持続しても、脆くも撤退する人々も多い。負債や自己破産という声も聞く。ここにも希望があるように見えな。第四次産業革命だ、流行のモノ・インターネット、ビッグ・データ時代だと騒がれても、何となく、いまひとつ、という気分は覆いがたい。

【Ⅳ】

では、どうすれば、希望を持って経営の道を歩み、希望を持って生きてゆけるのか。人として、健康や生きがいの持てる「経営の道」とは、一体何であろうか。

【Ⅴ】

大量生産型経営と価格競争の行き着いたところは？——現代の経営が不安定で、将来に希望が持てないのはなぜか

それは各人が自立していて、互いに相手を信頼できる、あるいは、尊敬できるという人間関係を基礎に仕事をしているわけではないからである。

「心のつながり」と「ひろがり」がないところに、損か得かの計算と、「この仕事は好きだから、うまくいきそうだ」という感覚的反応だけでビジネスが成り立つのだろうか。

常識では、ビジネスの世界は (6) 。背信・裏切りは世の常。だまされるほうが悪いと言われる。

このような「常識」が定着していて、いつ、なんどきひどい目にあわされるか分かったものではないと思われる。本来は、信頼関係のあるはずの、友人関係や家族関係、先輩と後輩の関係でさえ、いつ、なんどき「骨肉の争い」となるのか不明である。



そこで、成功した経営者ほど、企業の生き残りの要因は、信頼でき尊敬できる人の存在ではなく、研究開発投資による機械や素材の改善であり、商品の販売において、より多くの価値を生むつなかりを作り出すことである、と思いつ込んでいるかにみえる。そして、かれらは、企業が生き残るには「良いものをより安く・より速く・より確実に・より大量に」顧客に提供できるかどうかにかかっていると公言してはばからない。あたかも、大量生産システムによる価格競争に勝利できるかどうか。信頼関係とは無縁の、相手企業の存続を不可能にするような低価格での商品・サービス競争を仕掛けること。競争相手を倒産寸前に追い込んで事業の吸収や企業合併による独占的な支配を実現すること。これが勝者の秘訣とされてきた。

(中略)

(7)

今日までの大量生産・大量消費・大量廃棄に支えられた企業は、金銭的な利益を最大化しようとして、大規模化によるコスト削減を図り、価格競争と市場のシェア拡大競争に明け暮れ、人員整理などを目指した結果、金融資産が増加し、証券市場などに回すオカネは増えたので、営業外の利益や金融資産の値上がりによる利益は増えた。投資というよりも投機というべき利益が増えたのである。

しかし、一九九〇年代、バブル崩壊後、企業が量産型経営を目指して、機械やコンピュータを導入しつつ、人員整理を推進した中で、企業を支えてきた貴重な「熟達した人材」を失った。また、その結果、企業文化としての技を生かした創意工夫や技術革新力をも喪失する。さらに、中高年・熟練層の賃金部分を削減して若いコンピュータ技術者などを確保し、年功制賃金制度など勤続年数とともに給与待遇が改善される仕組みを終焉しゆうえんさせた。これらは、大規模企業の安定した企業経営をよりどころとしてきた日本人の人生観を根本から覆したのである。

ところが、<sup>(8)</sup>皮肉なことに、日本経済が高度成長時代から低成長・安定成長時代に達するにつれて、少子高齢化の傾向や、成熟した消費者や顧客からのニーズは「量産品」「標準品」では満足できなくなる。衣食住ともに「量よりも質」「質を求める多様な変化するニーズ」が生み出され始めた。

とくに象徴的であったのは、大都市の銀座における水や緑の存在と調和した、「良心的な」商品やサービス提供者と市民の出会いの場であった。そこには、伝統を今に生かそうとする老舗企業と現代文化の出会いがある。

また、化粧品品の供給と店頭のビューティ・コンサルタントに代表される「良心的に顧客の個性を発見して引き出すこと」のできる商品提供とサービスの結合もあった。さらに、対面による販売は化粧品品の生産者と顧客との関係に「美の演出家」ともいべき「良心的な経営者やプロデューサー」が介在することによって、両者のコミュニケーション関係が持続し、生産の改善や顧客の享受能力の向上が推進された。

対話の場は販売の場から、良心的な一流シェフのレストランの場や、卓越したデザイナーの活動する、華麗な店舗やショー・ウィンドー、さらには、美術館や博物館へも広がる。

これらの関係の中から、人々が「こころのよりどころ」人情や良心」を発見する機会も提供しうる。

(9)、京都をはじめ、歴史的な伝統を持つ多くの都市や農村で、内外の観光客や研修生、留学生、ふるさと学校、複合施設などによる交流人口の増加が進み、化粧品と並んで、観光事業が新産業の中核として登場してきた。

日本も、オーストリアやスイスに学んで観光文化立国への道を歩み始めたのである。

量産品が飽きられて売れなくなると量産型企業は危機に陥り、企業の集中や合併によって生き残らざるをえなくなるが、これは、(10)であり、根本的な問題に向き合うわけではないから、再び危機に直面する。

そこで、経営を根本的に転換して、良心的な経営者が、企業が創業から現在まで育んできた技や文化、熟達した人材を確保しつつ、熟練・技巧・判断力などを継承して、職人としての力量を持つ生産者が、情報技術を活用しつつ多様に変化する消費者ニーズに応答する。

質の高まりに対応しうる生産者と質の高まりを求める消費者の対話を経営者やコンサルタントが仲介して、質の高い多品種少量の供給システムを構築していく。

そこで、量産型経営者が機械の性能に応じて人材を取り換え、かなり過酷で良心的ではない経営を担ってきたのに対して、文

化資本経営者は、良心という「文化資本」をも元手にして、自然と人間が共生する場に、多様に変化する個性的な消費者ニーズに応答しうる生産・流通・消費者サービス・システムを構築する。このシステムは、良心的な仕事を達成できる、熟達した人材の力量を生かし、人が主体となった機械や建築物などを開発するよう配慮しつつ、個性をもつ人材を生かしあえる出番をつくりだし、顧客とのコミュニケーションを通じて、互いに学びあい育ちあう関係を生み出す。

(池上惇『文化資本論入門』による)

注 福原義春……資生堂名誉会長。

\* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 空欄(1)(7)に入れる小見出しとして、もつとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- |   |                 |                   |
|---|-----------------|-------------------|
| A | (1) よき人間関係の形成   | (7) コミュニケーションの重要性 |
| B | (1) 心のふるさとの重要性  | (7) 高度経済成長の功罪     |
| C | (1) 良心的な仕事とは？   | (7) 日本人の人生観の変貌    |
| D | (1) 日本社会の現状     | (7) 観光文化立国への道     |
| E | (1) リスクと不確実性の時代 | (7) 文化資本の経営とは？    |

〔問二〕 傍線(2)「現代都市という『砂のような』社会」とあるが、それはどのような社会か。その説明としてもっとも適当なもの  
のを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 世のため人のために生きるのではなく、自分一人が良ければよいと考え、周囲の人間との関係がぎすぎすしている社  
会。

B 目的を明確に持って生きることができるとはならず、何を頼りに生きていけばよいのかが分からなくなっている社  
会。

C 家族や友人といった心と心の通い合った人間関係ではなく、一人一人がバラバラな個人の集まりになってしまった社  
会。

D 努力すれば報われるというわけではなく、良い大学を出た者が将来性のある職や仕事に就くことができるといった社  
会。

E 日々の生活に不安を覚えるのではなく、堅実な職業に就いて、安定した生活を送ることをみんなが望むようになった  
社会。

〔問三〕 空欄(3)(5)(9)に入れるのにもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

A (3) とすれば (5) 他方では (9) さらに

B (3) では (5) しかし (9) たとえば

C (3) ならば (5) または (9) 一方

D (3) つまり (5) さらに (9) しかも

E (3) すると (5) あるいは (9) そこで

〔問四〕 傍線(4)「良心的な仕事」とあるが、それはどういう仕事か。本文全体の趣旨から考えて、その説明としてもっとも適當なもの

なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 企業に属することなく経済的に自立した個人が、金銭的な価値を追い求めることなく、社会に貢献する仕事。
- B 心のつながりやひろがり大切にしている人間が、自分の信頼した相手と一緒に手作りにこだわり製品を作る仕事。
- C 消費者との対話を重ねた生産者が、消費者のニーズをくみ取って、多くの種類の商品を大量に生み出す仕事。
- D 熟達した力量のある職人などが、多様に変化する消費者の要求に応じた商品を生産し、それを流通させる仕事。
- E いままで育んできた伝統や文化を重んじる経営者が、昔ながらの商品を変わずに作り続けていく仕事。

〔問五〕 次の一文を挿入する箇所としてもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

これらの傾向は若者たちの間では、「夢」「みらい」という表現と結合されて広がっている。

- A 〔I〕
- B 〔II〕
- C 〔III〕
- D 〔IV〕
- E 〔V〕

〔問六〕 空欄(6)(10)に入れるのにもっとも適當な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A (6) 跳梁跋扈ちやうりやうはつこ (10) 生兵法
- B (6) 傍若無人 (10) 姑息こな手段
- C (6) 妖怪変化 (10) 陳腐ちんぷな手段
- D (6) 夜郎自大 (10) 常套じょうたう手段
- E (6) 百鬼夜行 (10) 対症療法

〔問七〕 傍線(8)「皮肉なことに」とあるが、このように表現されるのはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から

ら選び、符号で答えなさい。

A 企業は熟達した人材を解雇し、若い技術者を大量に採用したが、彼らは思うように業績を上げることができなかったから。

B 企業は機械やコンピュータを導入した量産型経営にかじを取ったが、消費者は逆に商品の質を求めるようになったから。

C 企業は自らの創意工夫や技術革新を捨ててしまったが、後にそれらが高度成長をもたらしていたことが分かったから。

D 企業は大量生産・大量消費を目指したが、日本経済は低迷期に入り、それらを支えるだけの設備投資ができなくなつたから。

E 企業は安い商品を大量に売り、利潤を上げることがをのぞんでいたが、消費者は見栄えの良い高価な商品を求めていたから。

〔問八〕 本文の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 企業に就職して働くよりも、自らで起業し、良心に従って働く方が、生きがいのある生き方ができる。

B ビジネスの世界で成功した経営者は、心のつながりの大切さを知っている良心的な人であることが多い。

C 良心的な経営者というものは、利益を度外視して、顧客のニーズに応えたよりよき商品を作ろうとする。

D 良心を元手にした文化資本の経営を行うことで、よき人間関係を持つ社会を作り上げることができる。

E 個性を生かしたい良心的な消費者は、熟達した技を持つ職人が作った商品を買って求めるようになった。

### 三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ロボットは、環境情報を〈感知／認識〉し、ヒトから指令された目的達成のために自ら最適と〈考え／判断〉した方策に基づいて〈自律性・創発性〉、〈行動〉する（〈感知／認識〉＋〈考え／判断〉＋〈行動〉の循環：sense—think—actcycle）。しかしその〈考え／判断〉が、ときにヒトの思いもよらない突飛で危険なものになりうる（1）ことが、危惧されている。すなわち、ロボットや人工知能（AI）の最近の発展スピードが速すぎて、これを正しく理解・制御したうえで利活用するための社会の知恵が追いついていないことへの危惧が、広まりつつある。この状況は、アイザック・アシモフが大昔に憂いたような事態が、まさに今、私たちの目の前の社会問題となつて再現されているものと理解できよう。

2045年頃には人類を凌ぐ人工的な知能が開発され、一瞬で人類が危機に瀕する「シンギュラリティ」が本当に生じるのではないか。あるいは映画「ターミネーター」が描くように、人類に歯向かってくる機械に対し人類が劣勢に追いやられてしまうのではないか。ロボットやAIの開発・普及に対してそのような危惧の念が抱かれる原因のひとつは、猛スピードで進む開発を、暴走させずに制御できるだけの知恵がいまだ人類に備わっていないことに起因しているように思われる。

ヒトが生み出した道具——「創造物」——に対する制御能力を失えば、その道具の「創造者」——すなわちヒト自身——が危うい状況に至る。これは古代ギリシャ神話におけるプロメテウスの火や、イカロスの翼等々から、フランケンシュタインやターミネーター等々の現代的な文芸作品に至るまで、人文科学の分野において長く指摘されてきた「戒め」である。さらに日本ではつい数年前の2011年3月に、その制御不能な大惨事を目の当たりにした経験を、さすがの日本人もいまだ忘れてはいないであろう。本書の主題である「ロボット法」は、ヒトが生み出した科学技術が制御不能になることへの恐怖心と戒めを軽視することなく、手遅れになる前に考えうる危険性を事前に把握しこれに対処することが必要である、と捉える。それこそが今、ロボット法という学問分野が必要であると思われる理由である。

(2) ロボット法が必要と思われる現在の状況は、かつて「サイバー法」の必要性が叫ばれていた頃に似ているといわれている。イ

ンターネット系のグローバル企業がこぞってロボットやAIに関心をシフトしている事実も、ロボット法がサイバー法と似ているといわれる原因であるし、それに伴ってサイバー法研究者たちの関心もロボットやAIにシフトしているのみならず、インターネットの開発が実はアメリカの軍事開発研究予算によって推進されていた点も、ロボット工学研究の現状と同じである。

ところで、そのサイバー法の研究をすでに20年続けてきた筆者が、しばしば問われる質問は、「サイバー法という「六法のよな」制定法があるのか？」であり、答えは「No」である。そこで「サイバー法」とは何であるのかを説明する際に、筆者は次のように答えることにしている。まず「サイバー法」とは、ネットワーク上のサイバー空間で生じる法律問題を扱うひとつの学問・研究分野である。そして次に、そのような、既存のさまざまな法学分野とは独立した「サイバー法」という学問・研究分野が必要な理由は、インターネットという巨大なひとつのネットワークが現実世界とは異なる「サイバー空間」を形成し、かつその普及が社会に大きな影響を与えるから、その特性に着目した法のあり方を検討する必要があるのだ、と。

それでは「ロボット法」とは何か。それは成文法ではない。ロボット法は新しすぎるテーマであるから、いまだ成文法が制定される段階には至っていない。ロボット法とは、ひとつの学問・研究分野なのである。それではなぜ、独立したロボット法という学問・研究分野が必要なのか。その答えは次項で示す通り、サイバー法の場合とほぼ同じである。

『Robot Law』（ロボット法）(Edward Elgar Pub. 2016) の編集者のひとり、マイアミ大学教授のマイケル・フルームキンは、同書の中でロボット法の必要性を次のように指摘している。

ロボット法よりも前に出現したインターネットのように、ロボット工学は社会的かつ経済的に革新的な工学技術である。「中略」……ますます洗練化されるロボットと、その広範囲な普及は、広く多様な哲学的かつ政策的な諸問題の再考を余儀なくさせる。洗練化されたロボットの広範囲な普及は、既存の実定法制度との折り合いが悪く、そのために政策と法の変更が望ましい場合も出てくる。



他の主導的なロボット法研究者であるワシントン大学助教授のライアン・カロも、同様な指摘をしている。

またフルームキンは、上の引用文に続けておおむね次のようにいつている。ロボット工学の社会的・法的影響について検討するには、確かに今はまだ (3) かもしれない。ロボットが普及してからであれば、新しい技術が引き起こす新たな諸問題をもっと明白に把握できるであろう。しかしその段階においてはもはや、諸問題を設計によって回避するには遅すぎて手遅れである。すなわち「経路依存」が障害となる。

(4) 、ひとたびシステムが敷設されてしまえば、これを後では正することが難しくなり、ましてやそれを一掃することなどもつてのほかという話になってしまう。もし正しい基準を欲するならば、そして正しい法を欲するならば、いまだシステムが敷設される前の今の段階で検討を始めなければならぬと、フルームキンは指摘しているのである。

法学のみならず倫理学分野からも、今の段階から研究を始めておくことの重要性が表明されている。たとえばマサチューセッツ工科大学 (MIT) 出版から刊行された『ROBOT ETHICS: THE ETHICAL AND SOCIAL IMPLICATIONS OF ROBOTICS』(ロボット倫理：ロボットの倫理的・社会的な意味)(2014年)の編集者のひとりであるパトリック・リン博士は、30年前にコンピュータ事業がなし遂げたような発展をロボット産業も遂げて、いずれコンピュータのようにロボットもどこにでもある身近な存在になり、この予想に異議を唱える者はほほいないであろう、という意見の紹介に続けて、もしこの予測が正しければ、社会的・倫理的諸問題が生じるであろうと指摘する。そして、たとえば遺伝子情報に基づく差別禁止法が制定されるまでにはヒト遺伝子研究開始から18年もかかった事実や、ファイル共有役務を提供して著作権団体を怒らせたNapsterがサービスを停止してから10年近く経過した後にも著作権の諸問題が解決していない事実を指摘しながら、倫理研究が工学技術の発展に追いつくまでには時間がかかるので「政策的空白」が生じる、という懸念を示している。

ロボット兵器に関する国連の報告書も、「ロボット革命は戦争における次「世代」の主要な革命であるといわれており、火薬と核爆弾の導入に匹敵する」と評価し、ロボットの技術革新性が民生品ばかりか、軍事用の兵器の分野においても世界を変えてしまうほどの影響が懸念されている。

以上の代表的な指摘の例示から、ロボット法が必要な理由を次のようにまとめることができよう。すなわち、ロボットが私たちの生活や社会に大きな影響力を及ぼすと推測され、かつひとたび普及が進んでしまうとそのシステムを修正・撤回することが難しくなってしまうので、普及前の今の段階から研究を開始し、危険性を把握し、かつ対策を検討することが重要であるから、ロボット法という学問・研究分野が必要なのである。

本書の原稿執筆時点では、本書のようにロボットやAIの「法」に言及したり、「ディストピアな文芸作品」を比喩に用いる態度に対し、開発を阻害するとして批判する姿勢も一部散見される。一部の起業家や企業、エンジニアの方々には、「法」という言葉を耳にしただけで、「開発を規制する」と聞こえてしまうようである。あるいは「ターミネーター」という言葉が発せられただけで、マイナス・イメージだから「開発を阻害する」と感じてしまうらしい。

しかし本書はあえて、そのような一部の批判にもかかわらず、「法」について語り、かつ「ディストピアな文芸作品」も多く取り上げ紹介する。なぜか。それは、AIやロボットの(6)な開発がヒトにとつての危険性をはらむという指摘が世界に存在し、他方、その指摘を完全に否定できるだけの説得的な説明が欠けているからである。

たとえばAIやAIを搭載したロボットの大きな特徴は、開発者の予測を超えた自律的または創発的な〈考え／判断〉をする点にあり、かつそれは利点でさえあるという。しかし法律家からみれば、「予測不可能」の一語ほど、空恐ろしい文言はない。空恐ろしいとの観念を言い換えれば、「無責任」ともいえる。すなわち、何をすべきかわからないものを広く社会に普及させようなどという提案が、責任ある態度とはとうてい思われず、(7)「無責任」の一語こそがふさわしいと捉えられる。特に筆者のような不法行為法学者には、危険を極小化しつつ社会の安全性を向上させて人類にとつての効用を極大化させたいという想いがある。その不法行為法学者が、何をすべきかわからないものを広く社会に普及させたいなどという提案を受けた際に、これを無条件に承諾することは絶対にできないのである。

ところで「ディストピアな文芸作品」を比喩に用いる社会の姿勢が、ロボットやAIの開発推進を望む方々の一部から批判されていながらも、本書はなぜそのような姿勢をとるのか。その理由は、それが社会の抱く危機感なり不安を象徴しているからで

ある。(8)、ディストピアな文芸作品には、私たちが学ぶべき警告や戒めやビジョンが豊かに含まれているからこそ、筆者はそれらを比喩的に用いるのである。

(平野 晋『ロボット法 AIとヒトの共生にむけて』による)

\* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 傍線(1)「ヒトの思いもよらない突飛で危険なものになりうること」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ヒトが生きやすくなるように製作されたロボットを、うまく活用することができない可能性を持ち始めるということ。
- B ロボットが、ヒトが指令した以上の目的を達成しようとし、その意図が理解できない可能性を持ち始めるということ。
- C ヒトの予想もできないような知能を持ったロボットが、ヒトの制御を超えた行動をとる可能性を持ち始めるということ。
- D ロボットが、ヒトと同じような理性や感性などを持ち、ロボットだけの社会を構築する可能性を持ち始めるということ。
- E ヒトの能力に対してすべての面で上回るようになったロボットの存在が、大きな問題になる可能性を持ち始めるということ。

〔問二〕 傍線(2)「ロボット法が必要と思われる」とあるが、それはなぜか。その説明として適当ではないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A ロボットが社会の中に普及することで、私たちの生活に大きな影響を与え始めると予想されるから。
- B いったんロボットが普及してしまうと、それを正したり、取り除いたりすることが難しくなるから。
- C ロボットが起こす問題をシステム設計段階で避けるためには、ロボットが普及してからでは遅いから。
- D ロボットの影響は、心理的・倫理的な面が強く、現在の法律では対応が困難であると考えられているから。
- E ロボットの普及による倫理的問題を解決する研究が、工学研究に追いつくまでには時間を要するから。

〔問三〕 空欄(3)(6)に入れるのもつとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A (3) 前途多難 (6) 無鉄砲
- B (3) 時期尚早 (6) 野放図
- C (3) 前途多難 (6) 無規律
- D (3) 前途多難 (6) 野放図
- E (3) 時期尚早 (6) 無規律

〔問四〕 空欄(4)(7)(8)に入れるのもつとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A (4) だから (7) むしろ (8) 要するに
- B (4) つまり (7) だから (8) さらに
- C (4) だから (7) つまり (8) だから
- D (4) つまり (7) むしろ (8) さらに
- E (4) ただし (7) つまり (8) 要するに

〔問五〕 傍線(5)「『ディストピアな文芸作品』を比喩に用いる態度」とあるが、筆者はなぜ「ディストピアな文芸作品」を用いるのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A ロボットは、何をしでかすのかわからない危険なものであることを理解してもらい、普及・開発の中止を望んでいるから。

B ロボットやAIの開発・普及に伴う社会の不安を、観念的ではなく、わかりやすい形で提示してくれると考えているから。

C ロボットは、社会の対応の仕方によっては危険なものではあるが、人類の役に立つものでもあることを理解してほしいから。

D ロボットそのものは取り立てて危険ではないが、それを開発する人間の無責任さが問題であることを問題提起したいから。

E ロボットやAIの開発を規制したり、阻害したりするためには、いかなる手立てをも利用していかうと考えているから。

〔問六〕 本文の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人類は自らが生み出した道具で自らを危険な目にあわせるといふ、かつて経験したことのない事態に遭遇しようとしている。
- B ロボットやAIは、アメリカの軍事開発研究により開発されたもので、またもや人類を戦争に駆り立てる道具になりつつある。
- C 科学が進歩したことにより、人類はさまざまなことを享受してきたが、ロボットやAIもそのうちの一つになろうとしている。
- D ロボットをどこにでもある身近な存在にしておくためには、今後ロボット法をいかに早く整備していくかがカギを握っている。
- E 人類がこれから遭遇すると予想される危険に対処するためには、ロボット法という学問分野が、いま必要とされている。





—

—